

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2024年8月 NO.236



[もくじ]

- 2～3 時の数え方と太古の記憶…全 卓樹
- 4～5 合唱組曲「四万十川」…阪谷哲郎
- 6～7 おさらい会という劇団のこと～十年の活動を振り返って～…西村和洋
- 8～9 『死なれちゃったあとで』を読んじゃったあとで…山中由貴
- 10 身体文化としての吟詠…野中秀宗
- 11 「アンテナ」きもキャラグランプリ 2024 参戦…下尾 仁
- 12～13 高知市文化振興事業団5～6月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

時の数え方と太古の記憶

全 卓樹

むかし子供心に不思議だったの

は、時間の数え方に出てくる24や60、そして7といった不思議な数たちであった。なぜ一日は10時間ではなく、一時間が100分ではないのか。なぜ一週間は10日ではないのか。

実はそのように10進法で時間を区切る暦を定めた人たちがいた。

今から2000年ほど前のフランスで、国王の政府を倒した革命政府は、世の中の全てを「合理的」に変革すると意気込んで、暦の改革にも取り組んだのだ。一週間は10日、一日は10時間、一時間は100分と定められた。しかしこの暦は国民にとっても不評で、わずか12年し

か続かず、旧来の暦が復活した。

そもそもこの旧来の暦は一体いつどこで出来たのだろうか。

一つのヒントは曜日の呼び方にある。

曜日のフランス語は *lundi*、*mardi*、*mercredi*、*jeudi*、*vendredi*、*samedi*、*dimanche* というが、それぞれ月の日、火星の日、水星の日、木星の日、金星の日、土星の日、主の日という意味であり、日本語の曜日となぜかびったり対応している。どちらかが他方に影響したということは考えにくく、共通の起源があると推測できる。調べてみると5000年以上昔のシュメールの地に行き着く。現在のイラ

ク、ティグリス川とユーフラテス川に挟まれたメソポタミアの南部、知られている限り最も古い人類の文明が興った場所である。

シュメールの週には7曜日あって、順に月の神シン、火星の神ネルガル、水星神ナブ、木星神マルドゥク、金星神イシュタル、土星神ニヌルタ、太陽神シャマシの名で呼ばれていた。シュメール人がなぜ7日で一区切りの週を作ったかについては謎である。しかし7日の周期が人間の活動のリズムにちょうどあっていただろうことには、我々自身を振り返ってみても疑いがないだろう。

そしてこれは、一時間が60分

ある理由をも明かしてくれる。太古のシュメールではものの勘定に60進法が用いられていたのである。

ちよつと考えると、われわれが使っている10進法に比べて、60進法では桁上がりまでの数が大き過ぎて、不便なのではとも思える、しかし60は2、3、4、5、6全てで割り切れるため、2人、3人、4人、5人、6人で物を等分するときに都合が良い。数字の主要機能、古代人にとっては商業的取引のためのソフトウェアだったと考えると納得がいくだろう。一時間の仕事を30分ずつ2人で、20分ずつ3人で、15分ずつ4人で、12分ずつ5人で、10分ずつ6人で均等に分けることを考えれば、60進法の便利さが理解される。

一年を12の月に区分するものもシュメール起源である。

古代シュメールで発明された時間システムは、メソポタミア北方のアッカド、アッシリアに広まり、

古代文明の栄えた各地、ペルシャ、エジプト、ギリシャ、そしてインドへと広まった。仏教を介して唐代の中国に至り、遣唐使、空海の手を通して極東の島国にまで達した。

今では地球のあらゆる場所でも、シムメール暦に基づく共通の暦が使われており、地球のどこでも時の流れが同じである事を考えれば、これは合理的であるといえるだろう。

しかし今や宇宙時代、火星での時間の区切り方はどうあるべきだろうか。将来火星に人間が移住した場合、どのように時間を区切ればいいのか。天文学者の中にはそういう気の早いことを考えた人がある。

火星の一日は地球の時間で数えると24時間39分35秒であり、これは地球の一日より2・75%長い。当然火星でも一日を24時間にして

おくのが便利だろうから、これは火星での一秒、一分、一時間、一日を、すべて地球の2・75%長く設定することになる。

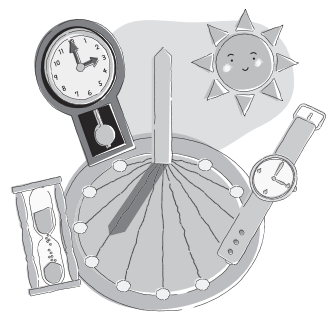
火星の公転周期は火星の自転周期の668・59倍であり、これを平易に言うと、火星の二年は668・59火星日だということになる。アメリカの航空技師トーマス・ガンゲールが考案した火星のための「ダリウス暦」では、一年を27日と28日からなる24の月で区分する。これで668火星日を尽くしたのち、0・59という端数は、地球での暦と同様、一日余計に加えた閏年を適宜挟むことで調整することになる。

地球と同様に火星の自転軸も公転軸に対して傾いているため、火星にも四季がある。火星の軌道は地球よりだいぶ潰れた楕円であるため、太陽からの距離が季節により大きく変化する。太陽により近い位置で起きる北半球の冬は比較

的に温暖で、太陽から遠い位置で起きる北半球の夏は涼しい。南半球では逆になり、夏の暑さ、冬の寒さともにより厳しい。そのため火星に人が住むとすれば、北半球に集まることになるだろう。

ガンゲールは火星の紀元一年を地球の西暦1609年に置いた。これはケプラーが火星の運動の観測と解析から「ケプラーの三法則」を導いた年である。

100年後、あるいは500年後、1000年後にわれわれの技術が十分進化して、人間が長期にわたって居住する火星の植民都市ができている可能性は高い。火星移住者たちが時計を眺めるたび、カレンダーをめくるたびに、古のシムメール人の精神をなぞっているだろう事を思うと、時と場所を超えた太古の記憶の継続性に、不思議な感慨を覚えるのだ。



ぜん たくじゅ

京都生まれの東京育ち、米国ワシントンが第三の故郷。東京大学理学部物理学科卒、東京大学理学系大学院物理学専攻博士課程修了、博士論文は原子核反応の微視的理論についての研究。専攻は量子力学、数理物理学、社会物理学。量子グラフ理論本舗／新奇量子ホロノミ理論本家。ジョージア大学、メリランド大学、法政大学等を経て、高知工科大学理論物理学教授、同大学附属情報図書館長。著書に『エキゾティックな量子』（東京大学出版会）、『銀河の片隅で科学夜話』（朝日出版社）、『渡り鳥たちが語る科学夜話』（朝日出版社）など。

合唱組曲「四万十川」

仮谷 哲郎

【平成十年】

▼二月／合唱組曲「四万十川」を作る会設立総会を開催。活動方針の確認、歌詞公募の公表、作曲を木下牧子氏に依頼することなどを決定。県庁内で募金活動を開始。制作委員会で基本方針をまとめる

▼三月／幡多建設技術会より支援金を受ける。制作委員会で公募要項をまとめる

▼五月／歌詞公募の受付開始

▼六月／現代詩手帳六月号に公募要項を掲載。作曲家の木下先生による四万十川流域の視察。初演の会場が決定（高知県立県民文化ホール）。県内市町村での募金活動を開始

▼八月／街頭での募金活動（高知市中央公園）に篠原勝之氏（クマさん）が応援参加

▼九月／初演実行委員会（代表者三名）により方針案を作成。歌詞公募を締め切り（応募総数は百十組）、選考を開始。予備選考（九月）、一次選考（十月）、二次選考（十一月）、三次選考（十二月）

【平成十一年】

▼一月／選ばれた歌詞を添えて、作曲家の木下先生に正式に作曲を依頼

▼三月／幡多建設技術会より再度支援金を受ける。高知県文化財団

この合唱組曲「四万十川」が誕生するまでの様々な出来事や経緯、曲の聞きどころなどを皆さんにご紹介したい。

この曲が誕生したのは、今から三十年ほど前、平成四年の年末頃に、私と高知県庁に勤める友人が「高知の四万十川をもっと全国のの人に知って貰いたい。例えば九州なら『筑後川』という合唱曲がある。高知も『四万十川』の組曲を作って、全国の人に発信したい」という熱い話で盛り上がったことがきっかけであった。

それから数年が経過した平成九年、当時の橋本大二郎知事の発案で「高知を元気にする企画」を県庁職員から募る提案事業の話があり、友人らがここぞとばかりに「四万十川をテーマにした合唱曲を作る」という企画を応募。幸運にも採用が決定した。歌詞はできる限り市民からの公募にしたいと

平成十一年七月二十四日、高知県立県民文化ホールで、ある合唱組曲が初演を迎えた。当時の橋本大二郎高知県知事の「高知を元気にする企画を」という発案から生まれた、合唱組曲「四万十川」。合唱を愛する多くの市民と、地元を思う行政、そして作曲家や演奏家、指揮者が一体となって作りあげた名曲が誕生した瞬間であった。あれから二十年以上が経ち、自然災害や感染症、不安定な世界情勢の中で私たちはそれぞれの困難や苦難に立ち向かっている。この困難を乗り越え、高知を、そして私たち自身を元気にするためにも高知を代表する四万十川をテーマとしたこの合唱組曲を、心を合わせて歌いたい。その呼びかけのもとに集まった約百三十名が、今年の十月六日（日）に高知市文化プラザかるぼーとの大ホールでその歌声を響かせる。

による支援の一環として「四万十川」初演を県民文化ホールの自主文化事業として開催することが決定。作曲者と作詞者による詩編集作業が完了

▼四月／初演に向け練習を開始。芸術文化振興基金助成金交付決定。チケット販売開始

▼五月／第一楽章「雲の上」完成

▼六月／詩の選考結果発表

▼七月／第五楽章「旅立ち」完成。合唱とオーケストラの第一回合唱練習

▼七月二十四日／合唱組曲「四万十川」初演（高知県立県民文化ホール）



次に、曲の聞きどころについても触れておきたい。この曲は、天空の一雫が雄大な河口への流れを五部構成で表わしている。まず、第一楽章「雲の上」は、雄大な自然を背景に、雲が一滴の雫となり大河になるまでを描いたもので、五曲の中で最も長く起伏に富んだ作品である。これと終曲（第五楽章）の「旅立ち」が対をなす。曲のクライマックスでは同じ旋律が現れるが、これこそが「四万十川」を象徴している。この重量感のある二曲に挟まれるのは「川狩り」のなかに「祈り」の三曲で、作曲の木下先生も、ドラマティックに変化する川の様々な表情を表し

ているとおっしゃっている。

最後に、全国でも時々演奏されているこの曲を、オーケストラ伴奏で全曲演奏するのは、十月にかかるぼーとで開催する『合唱組曲「四万十川」コンサート』が随分久しぶりとなる。この高知県から生まれた合唱組曲をこの機会に是非とも楽しんでいただきたい。指揮は初演時の指揮者である本山秀毅先生が再び務めてくださることになり、オーケストラは四国フィルハーモニー管弦楽団、さらに作曲者の木下牧子先生もおいで頂ける予定となっており、私たち高知県合唱連盟としても総力を挙げて演奏したいと強く思っている。

※オーケストラと合唱による演奏時の正式曲名は『混声合唱と管弦楽のための「四万十川」』

かりや てつお
高知県合唱連盟 副理事長

合唱組曲「四万十川」コンサート

日 時：10月6日（日） 14時開演

会 場：高知市文化プラザかるぼーと（大ホール）

入場料：一般 2,000 円 大学生以下 1,000 円（当日は各 500 円 UP）

※未就学児の入場はご遠慮ください

チケット販売所：かるぼーとミュージアムショップ、ローソンチケット、チケットぴあ



▲公演詳細

おむろい会とく劇団のいよ 十年の活動を振り返って

西村 和洋

「おさらい会」という小さな劇団があります。高知市内での上演がほとんどないため、ご存知ない方が多いと思います。発足は二〇一五年。舞台芸術活動の原点に立ち返り、その役割や機能の特性等を「おさらい」すること、創造・発信・育成・交流プログラムを試み、まちづくりに貢献してみようという意味で「おさらい会」と名づけました。

満足な活動もできないでいた発足当時、高知で活動する劇団33番地の刈谷公治さんをお願いして一人芝居をつくり、本格的な活動をスタートしました。翌二〇一六年には、同じく高知の劇団、シアターTACOGURAの藤岡武洋さん演出で、谷崎潤一郎の『お國と五平』をつくりました。この作品で、富山県利賀村で開催された演出家

のコンペ「利賀演劇人コンクール2016」に藤岡さん自身が演出家としてエントリーして臨み、上演にこぎつけられた団体のうち三位にあたる奨励賞を受賞する快挙となりました。

その当時、大豊町梶ヶ森のすぐ下にある集落の八畝^{やうぬ}の地域と交流をはじめていたおさらい会は、利賀村での上演が野外だったこともあり、『お國と五平』を藤岡さんと共に八畝の棚田で上演することになりました。その頃、八畝には高知大学農林海洋科学部の学生たちがボランティアに入っており、地域の皆さんと交流をされていました。特に「地キビ」と呼ばれるトウモロコシの硬粒種を育て、「地キビ焼酎『八畝』」という商品を生産させたことは画期的でした。そこで、地キビ焼酎と鹿や猪肉の

ジビエを楽しみながら演劇を楽しむというプログラムはどうだろうかという話が浮上し、以降、八畝との交流は毎年春と秋に上演を行うことになりました。高知市内から八畝までお客さんをマイクロバスで送迎し、八畝からの眺望や暮らしの文化を垣間見てもらう。高知市周辺に暮らす人々が中山間地域に暮らす人々と交流することもねらいに、一緒に食事会も行い、合わせて棚田や大きな屋敷の空間を使って上演プログラムも行う。春には学生たちが栽培に取り組んでいたシャクヤクの花も楽しんでもらい、秋には地キビの収穫体験などもしてもらおうという活動でした。

この活動は二〇一六年秋から二〇一九年秋まで継続しましたが、新型コロナウイルス感染症が流行した二〇二〇年以降途絶えてしまっています。おさらい会の活動自体は二〇二〇年秋に高知市の土佐神社の境内をお借りし、鼓樓前に仮設舞台をつくって野外上演を行い継続しましたが、翌年五月に予定していた上演は感染拡大のため中止せざるを得ませんでした。

現在コロナ禍は明けましたが、八畝での活動は再開できていません。その理由はいくつかありますが、一番大きな理由は劇団を支えていた俳優の山田憲人が、利賀村を拠点に活動している演出家の鈴木忠志さん率いる「SCOT」へ二〇二二年春に移籍したことです。おさらい会は当初から鈴木さんが創出した俳優訓練法「スズキ・トレーニング・メソッド」を稽古の基礎に取り入れてきた劇団です。そのような点からも山田が鈴木さんに声を掛けてもらえたことはたいへん名誉なことでした。移籍後の彼は国内外の公演に出演する機会を得て、この夏も利賀村でのプログラムや海外での上演に出演するとのことでした。山田を失うと共に、他のメンバーらの就職や結婚といったライフステージの変化も重なり、一気に戦力を失ったおさらい会は以降何の活動もなくなってしまうました。

ところが、二〇二二年の暮れ、俳優をやってみたいという田中知之が現れました。彼はもともと八畝での活動をサポートしてくれていた学生スタッフでした。大学卒



八畝の棚田で行った公演の様子

業後県内の企業に就職していましたが、山田の演技を見て自分もやってみたくて言うのです。そこで年明けからさっそく稽古開始。とはいえ劇団の俳優は田中一人。習作という意味で宮沢賢治の『よだかの星』を一人芝居としてつくってみようとスタートしました。しかし、演技に慣れない田中は、ずっと悪戦苦闘の連続でした。稽古は遅々として進まず停滞。あつという間に九月になった頃、突然田中が「来春東京に出て就職する予定だ」と言い出したのです。あつけ

にとられました。それなら寒くなる前に一度、八畝で上演会をしようということになりました。習作としてつくった『よだかの星』でしたが、上演を前提につくり込んでいこう、上演は八畝のパワースポットでもある観音堂前で十一月にやると決めました。

当日、久しぶりの上演会となるおさらい会と八畝の住民の皆さんは、少し緊張しながらも明るい雰囲気包まれていました。田中の演技はまだ完成していませんでしたが、見に来てくれた皆さんに大きな拍手をいただき無事幕を下ろすことができました。その後、田中の友人や知り合いにも彼の演技を見せておきたいと思うようになり、急遽今年三月にいの町成山と高知市で上演会をもつことになりました。ようやく完成した田中の『よだかの星』。来場してくれた多くの皆さんからは、たくさんの方の言葉と拍手をいただきました。また旅立つ田中への餞別代わりに私も同じ宮沢賢治の『告別』という詩を朗読しました。当日まで秘密にしていたサプライズだったため、田中は大変驚いていましたが、

彼を送り出すに相応しい上演会となりました。

以上、のらりくらりとこの十年近くにわたるおさらい会の活動を振り返ってみました。もつと細かな話はあるのですが大まかにいえばだいたいこんな感じだったと思います。

先にも述べたように、おさらい会は、過去からたくさん蓄積されてきた「演劇の知」を学び直しながら活動するという意味を込めて、おさらい会としたものです。八畝では、やはり棚田での野外上演が一番の特徴でした。最初の上演こそ棚田に舞台を組んで行ったものですが、その後はお客さん各々に椅子の代わりにみかんコンテナを好きなところに置いてもらい、一枚の大きな棚田全体を使って観客も舞台の中にあるような状態で上演を行うようになりました。使い慣れた劇場の空間ではなく、つかみどころのない大きな空間と格闘することで、今まで味わったことのない非日常を山の中に出現させてみせる。そんなダイナミズムが私たちのこだわりです。また、上演するテキストもしゃべり慣れた

現代口語の台本ではなく、『玄朴と長英』『生きてゐる小平次』『父帰る』『息子』などといった、日本語にもかかわらず現代の私たちにとって話すのが難しいと感じるような大正期に書かれたテキストを採用し、今ではほとんど誰も触ることのない戯曲の面白さを体現してみせる。おさらい会の活動は、演劇好きやその界限にいる人たちに通じるだけの言葉ではなく、普段演劇と関わりのない、その外側にいる多くの人々にも通じる言葉を探ることを大切に考えてきました。そんな取り組みをささやかに行ってきたのがおさらい会という小さな劇団の十年です。

またいずれ活動を再開したいと思っています。そのときはどうぞ見に来ていただければ幸いです。

にしむら かずひろ

一九七〇年 土佐市生まれ。
演劇集団の「H」主宰を経て、おさらい会を発足し演出を担当。高知演劇ネットワーク・演劇初代表

『死なれちゃったあとで』を 読んじやったあとで

山中 由貴

わたしがこの人感情あるのかなと疑っているある出版社のお友だちから、「この本すごくいいので読んでください」とおすすめされたのが、前田隆弘さんの『死なれちゃったあとで』というエッセイ集だ。その人がそんなことを言うのはほんとうに珍しいので、ことばにはしつかり重みがあった。

それは著者の前田さんが、自身が体験した「親しい人との死別」について考え、コミカルに、そして率直につづったいくつかの文章をまとめたものだ。前田さんはフリーランスのライターで、インタビュアーとして多くの人の話を聞く「聞き手のプロ」でもある。

彼の大学の後輩だったKが自死したこと、死んだときのズボンのポケットには「情けない人生でした」というメモ書きが残されていたこと、後輩の死後、Kが自分のインタビュアーとしての人生にどんなふうに関わっていたかを悟ったときのこと。

あるいは海で事故死した父親の、びっくりするような隠し事のこと。SNSでつながっていた人の、途絶えてしまった投稿のこと。

読んでいるうち、ふしぎと自身自身の「死にまつわる思い出」が呼びさまされる。

わたしが忘れられないのは、父の死だ。

父は六十歳で死んだ。夏に癌が見つかり、余命半年と告知されたから三か月あとのことだった。わたしは二十代半ばで、実家のすぐ近くで暮らしていた。

余命宣告を受けたあとの父の顔を、死ぬまですっと、まっすぐ見られなかった、ような気がする。思い返すとそれはもういろいろと、もつとこうすればよかったあすればよかったと思う。

十回忌のときにこんなことがあった。

法事のあと親族一同で食事をしていると、むかし父親がスナックでご機嫌に歌ったカラオケのカセットテープが出てきた。父親の姉がそれをみんなで聴こうと、居酒屋

屋にラジカセまで持ってきていた。神妙に静まったみんなの前で、父親の野太い歌声がそれはもう陽気に、朗々と、響いたのだった。

死んでから十年間聞くことのない父の声を耳が受けとった瞬間、細胞でそれが父だと感知したというか、ぶわーっつと鳥肌が立って涙が出た。家族全員泣いた。そして笑った。

その泣き笑いの感情を、『死なれちゃったあとで』は思い出させてくれる。

故人とのたわいない会話やエピソードをだれかと語りあったり、なにかに書いたり、アウトプットする機会は、じつはなかなかない気がする。

わたしはいつとき希死念慮にとりつかれたことがある。

気づくと「死のっかなー」と頭のなかで何百回もひとりごとを言っている。自殺した人のニュースを目にすると引きずられるという感覚がたしかにあった。

それをだれかに打ち明けること

はやはりなかなかできない。いまは、いまのところはとりあえず大丈夫みたいだ。だとしてもやつぱり、打ち明けられたほうも困るだろう。

でもここで、いま、書きちゃうのだ。

『死なれちゃったあとで』を読んじやったから。

本のなかで、著者と親交のあつ

た兩宮まみさんのことばが引用されている。兩宮さんは二〇一六年に亡くなった作家で、以下は彼女が死生観についてブログにアップした文章だ。

でも、自分から死なずに生きているのは、

希望を信じているひとのほうが、正しく見えるから。

たとえ報われなくとも、希望を信じて生きるひとのほうが、美しく見えるからだ。

ここを読んでわたしは、あゝ、あのときの自分に読ませたいな、と思ったのだ。

「死」はだれにとつても重いテーマだ。日常で天気の話みたいになく、気軽に人に話せるようなものではない。語るほうにもそれを聞くほうにも、空気が整うのを待つ必要がある。それをなんだかフットワーク軽く、「ほいっ」と読まされる。この本はそんな感じなのだ。死んだあの人のことをだれかに

喋りたい。死なれたとき思ったこと、思い出したこと、いいこと、悪いこと、故人の恥になっちゃうようなことも、この際だから披露したい。死にたくなかったことがあると、ふわっとカミングアウトしたい。もしまたそうなら助けてねって言っておきたい。それでいい気がする。そうしたほうが、喋らないよりずっとずっといい気がする。

死が自分にとつてどんなものかを考える時間が、この本を読むことで生まれるのだ。

死にたくなったら読みたいし、死なれてつらいときに読みたい。でもそうなるまえに、やつぱり読みたい。読んでほしい。

「死」はだれにとつても重いテーマだ（二度目）。でもそれに囚われずに、会いに行つて、話して、笑つて、憶えておきたい。身構えないで、死について語りたい。父ともっとお喋りすればよかった。話をきけばよかった。何度でも顔を見に実家に寄ればよかった。

ほんとうにすぐ近くにいたのに、死がこわくて、見つめられなかった。

余談だけど、父の癌が見つかるまえ、離婚するーと言っていた母は、父を最期まで看取り、いまカーステレオでしょっちゅう父の歌声を流していつしよに歌っている。

死なれちゃったあと、たくさん思い出せるように。

死んじやったあと、たくさん思い出してもらえるように。

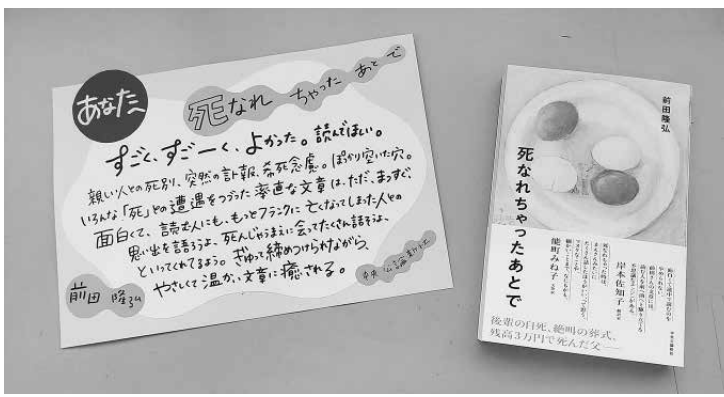
そうなるまえに、この本を読んでもほしい。

やまなか ゆき

一九八〇年 高知市生まれ。

TSUTAYA中万々店の書店員なましんぶん編集長としてX(旧Twitter)やっています。

好きな本について喋るときだけ饒舌になります。



身体文化としての吟詠

野中 秀宗



「吟詠」とは、漢詩や和歌、俳句などに節を付けて吟じる日本固有の伝統芸能です。詩の内容を理解し、詩語の表情や質感を声で表現することで作者の感性を感じ取ることを楽しむのひとつです。また同時に腹式呼吸を基本とする身体文化でもあります。

私が吟詠道を選んだのは、父(野中秀鳳)の芸に憧れたからです。私は今年で吟歴三十六年となりますが、当時、吟詠家として全国区で活躍していた父からすれば「気安く吟詠をしたいなどと言うものではないぞ」と思ったことでしょう。



同期に少壮吟士となった皆さんと(筆者は左)

う。親子は入門した日を境に師弟という関係性を優先することも多くなりました。先ず高知県下のトップになることは当り前の私の目標となり、四年で果たし、次は四国へ全国へと決して追隨を許さない父の背中を追いつめる日々でした。

その後、二代家元の立場を頂き一人の吟士としての視座で無く、組織調和と発展を考えるための修行が始まりました。程無く吟界の最高峰と言われる「少壮吟士」を目指すこととなりました。二〇一八年三月十一日、公益財団法人日本吟剣詩舞振興会・第四十六回全国少壮吟詠家審査コンクールにて三度目の合格となり、既定により晴れて少壮吟士の称号を頂くことが出来ました。「結果を出す」ための精進の日々。通過一回目からの間は元旦ですら課題十五題の絶句、律詩五題が静かに私の内側を支配している可笑しくも集中した日々でした。

幾度となくコンクールの為に羽田行の機内から見る空は、常に孤



父であり師の宗家・野中秀鳳と筆者(左)

独な自分との語らいの時であり、故郷に向かう失意の機内は、更に一年この苦行に向き合うのだと意を決する時間でありました。片道切符の吟詠道は振り返ればなんと豊かな時間であったのかと今になってとても有難く思います。

さて、これから吟詠と出会う方に向けて。現代は、何処の街でも同じ品やサービス・有り余る情報を万人が享受することが出来ます。常にモノはあるという世界。しかし翻せば、それは内的な「渴望」に出会えない目隠しの世界、創造性が育たない世界でもあります。

この吟詠道において得られたものがあるとすれば、身体的神秘性の発見です。吟詠では、基本となる「息の道」を創り活性し左脳ではなく右脳でイメージを捉え、身体で息を創って声にする此の行程が、生きる「氣」を養う術として有効です。つまりマインドフルネスの作用もあります。更に注目して欲しいことがあります。現代社

会では無意識のうちに美しい日本語からも遠ざかっているというところ。「言語が国を守る」と言います。日本人が自分の力を最大級に発揮できるのは日本語という言語を用いる故です。都内の電車内のつり広告に全て外国語のみのものを目にする昨今、これは注目すべき事柄なのです。

吟詠の価値とは「身体文化」である点です。私が頂いたものは、父の呼吸であり父の師匠たちから伝承された身体です。後世に継承すべきはトロフィーの数ではなく、連綿と引き継がれてきたこの日本人の「身体」そのもののなのです。私が考える文化の役割とはこの継承にあると信じています。

※少壮吟士

吟詠の芸術的向上を図り、吟剣詩舞道界の将来を担う人材を育成するために日本吟剣詩舞振興会において設けられている制度。

のなか しゅうそう

一九六五年 高知市生まれ
夫と猫4匹、犬1匹との暮らし
着物好き 家が好き 3人の子
どもは已に独立

秀鳳流日本吟詠会 二代家元
「伝統文化」の役割や残すための
方法について考える日々。もっと
気軽に吟詠を習える形を模索中。

「ファンテナ」 きもキャラグランプリ 2024参戦



下尾 仁

昨年末、滋賀県で活動する「びわ湖くん」というゆるキャラから、四月に同県で開催する、ゆるキャラならぬ「きもキャラグランプリ」という大会に、僕と友人のゆうやけ君が扮する、はりまや橋の欄干の妖精「はりまとやばし」に参加してほしいとオファーを受けた。当時「来年は海を渡る」を目標にしていた僕は願ったり叶ったりで参加を了承した。

しかし軽四自動車しか持っていない僕達。荷物を乗せ軽四で滋賀に行くのは厳しいと思っていたところ、はりまとやばしのPV撮影をしてくれた普通車持ちのYさんが「車出すよ」と名乗り出てくれた。感謝!!

後日、びわ湖くんから大会のチラシの画像が届いた。開催日は四月十三日、十四日、会場は滋賀農業公園ブルームの丘。『一番キモいのは誰だ!? きもキャラGP 2024』と銘打ったチラシには参加キャラの紹介が。まず、お金大好き女も大好き権力はもつと好きな主催「びわ湖くん」この大会がデビューの謎だらけ、びわ湖くんの相方「ふなずしくん」。ボルダリングの魅力を伝えるため人間界に来たボルダリングの壁の妖精「ボル姉さん」(東京)、柳

田國男のふるさとであり著書にも登場する河童(ガタロ)の弟役として誕生した「ガジロウ」(兵庫)、似顔絵の多様性を広めるために生まれた「しきつしー」(福岡)、ゆるキャラだけど、うんこはゆるくないをキャッチコピーにトイレからやってきた、人間が変身した「ぶりてい ☆うんこマン」(福岡)、そして僕ら、小さな橋から大きな笑顔をもつと「はりまとやばし」全7キャラの参加であった(内心、少ないと思ったりもしたが)。

大会初日の前日、ゆうやけ君とYさんは僕の店に集合し車に荷物を積み込んだ。ビールで乾杯し、翌朝五時に出発すると決め早め就寝。翌朝、無事の到着を祈願し差し入れの栄養剤で乾杯し、滋賀に向けて出発した。しかし道中はハプニングの連続であった。Yさんが高速の無人サービスエリアのトイレに携帯を置き忘れ(その後、道路管理会社の方が発見してくれ無事にYさんの手元に。父親の形見の携帯だったらしく見つかって本当によかった)、さらには車が突然ビュッという警告音を発し、このまま動かなくなるのではないかとドキドキしながらの運転であった。京都の辺りでも渋滞に巻き込ま

れたが無事に滋賀にたどり着き、会場の近くのインターで降りるとそこは田園風景の広がる見事な田舎であった。

会場に着くと駐車場にはものすごい数の車が。ここが会場かと思うと武者震いがした。しかしなぜかたくさんの方を連れた人達がいる。その車の多くはきもキャラ大会ではなく、同時開催の犬のイベントに来ている人達のものであった。

右も左も分からずいると参加きもキャラのぶりていさんが僕達を部屋に案内し一連の流れを説明してくれた。参加キャラが会議室に集合して挨拶を交わし、ギリギリにやってきた主催のびわ湖くんが、僕もよく分かってないのでゆるくいしましようにと皆を和ませた。この日は真夏のようなカンカン照り。ゆるキャラ泣かせの暑い日なので無理しないようにとステージに向かった。いよいよ大会が始まり会場を見渡すと、はりまとやばしのTシャツや帽子を身につけた人が。ステージを降りるとひっきりなしに写真撮影。初めての県外なのにファンの人達が駆けつけてくれ嬉しいかぎりであった。ダラダラと始まり終わった感じの一日目。びわ湖くんは別の案件があると言ってすぐに移動していった。なかなかの売れっ子である。

僕は反省会と交流会を兼ね、ボル姉さん、しきつしー、ぶりていさんと一緒に食事へ。せっかく滋賀にきたので近江牛も頬張った(美味)。ゆるキャラになった経緯や活動内容などの話もして、今後のはりまとやばしの参考になった。食事後、宿泊先に移動。明日も頑張ろうと言い合い解散となった。

さあ二日目スタート。前日の投票結果が発表され、一位はなんとはりまとやばし。これはあるかもと気合いが入ったがこの日も暑く、始まってすぐにバテてしまい無理はできなかった。犬のイベントも引き続き開催されており、たくさんの方と飼い主に不思議そうに見られ、時折吠えられたりもした。二日目も結局ダラダラと過ぎ、結果発表の時を迎えた。七位ボル姉さん、六位ぶりてい ☆うんこマン、五位ふなずしくん、四位しきつしー、三位びわ湖くん…、ここで呼ばれなければ一位である。平常心を装いながらも内心はドキドキ、二位は…はりまとやばし。ありや呼ばれたと思いつつも大健闘の第二位。一位は見た日本当にきもキャラのガジロウであった(納得)。閉会式と後片付けも終え、集合して挨拶。またお会いしましょうと、車に乗り込んだ。そして(また車の警告音がピコッと鳴りはしたが)無事に高知に到着。

初の県外に手ごたえも感じ、六月にはついに東京デビュー、十一月は大阪デビューの予定である。はりまや橋に出没してから約一年半、じわじわと認知されていると思っているのだが、調子にのらず謙虚な姿勢と強い信念をもちつつ活動をしていくので、是非よろしくお願いします。

しもお ひとし

一九六九年生まれ。

岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

5～6月の事業から

「12人の怒れる土佐人」 戯曲翻訳ワークショップ

高知市出身の演出家・俳優の細川貴司さんを迎え、高知市文化プラザかるぼーとほか県下の四施設を巡演する市民参加演劇公演「12人の怒れる土佐人」の上演に向け、原文戯曲を翻訳するワークショップを開催しました。

原作は数多くの映像作品や舞台作品として上演を重ねる「12人の怒れる男」。少年による殺人事件の裁判に選ばれた陪審員十二名が、テーブルを囲んで熱い議論を行うという作品です。講師は演劇翻訳・映像翻訳家として活躍する永田景子さん。全国的にも珍しい企画のため、どれくらいの参加者が集まるか不安でしたが、募集を開始すると、慈善通訳ボランティアの方、外国の方に日本語を教えている方、現役大学生で英米文学を専攻されている方、スコットランド出身で現在は高知で働かれている方など、さまざまなバックボーンを持つ、十代から七十代までの十二名の方に参加いただきました。ワークショップは基本NOOMでのオンラインで行われ、事前に振り分けたパートをそれぞれが翻訳し、それを原文、日本語訳で読みながら、単語の意図や時代背景などを探りつつ進めていきました。戯曲の翻訳という作業のため、一文の中に書かれた単語だけでなく、前後のページで書かれた言葉に翻訳のヒントがあったり、翻訳家が根気強く本を読み解く作業の大切さを知る機会となりました。

翻訳作業は標準語への翻訳の後、登場人物の個性に合わせた土佐弁翻訳までを行い、出来上がった台本は出演者に託され、現在稽古の真っ最中です。今を生きる土佐人で生み出される本公演、ぜひご期待ください。

開催日 五月十日（金）～六月三十日（日）全八回
参加者数 十二名

新・祝祭音楽劇「小さな星の王子さま」出演者・サポーター募集

障害のある方を含む様々な個性を持つ方や多様な立場の人々が、協働して演劇作品をつくるプロジェクトとして2021年に上演し、県内外で大きな評価を集めた祝祭音楽劇「小さな星の王子さま」。この作品の脚本を新たにし、高知市文化プラザかるぼーとで再演します。



【募集対象】

高知県内に在住する中学生以上の方（サポーターは高校生以上の方）。
※障害や舞台経験の有無は問いません。
※参加にあたりサポーターが必要な方はご相談ください。
※18歳未満の方は保護者の方の同意が必要です。

【応募条件】

面談・稽古・本番に参加できる方

【面談日】

2024年9月21日（土）・22日（日）のいずれか

【稽古日程】

10月6日（日）以降、日曜13:00～17:00、
木曜18:30～21:00の週2回

【本番日時・会場】

2025年3月9日（日）14:00開演
高知市文化プラザかるぼーと大ホール

【申込方法】

- ①PC・スマートフォン
右下のQRコードから申し込みフォームに移動します
- ②郵送・ファックス
申込書に記入し、郵送またはファックスください
〒781-9529 高知市九反田2-1 高知市文化振興事業団
ファックス番号: 088-883-5069
- ③電話
受付時間: 月曜を除く9:00～20:00
電話番号: 088-883-5071

【申込締切】

2024年8月31日（土）

【出演者参加料】

2,000円（保険料として）



高知市文化振興事業団

仕立て屋のサーカス高知公演

音楽家・曾我大穂さんが主宰・演出し、様々なジャンルの制作プロジェクトチームで構成される舞台芸術グループ「仕立て屋のサーカス」高知公演を開催しました。

曾我大穂さんがかかるぼーとで上演するのは、即興演奏の音楽と映像を融合させ



たカンパニー「CINEMA dub MONKS」として、二〇〇八年に行ったアートイベント「ホリカワアートミレーティング」での出演以来、二〇一四年以降は仕立て屋のサーカスの活動を中心に、世界中でパフォーマンスを重ねています。

舞台上立つのは曾我大穂さんと、服飾家のスズキタユキさんのふたり。高知公演では照明家の渡辺佳奈さんがはじめてカンパニーに加わり、新たな舞台を創り上げました。



迎えた本番。会場ロビーでは飲食や服飾、本、レコードなど、さまざまなマーケットが並び、多くのお客さまで賑わいます。舞台の準備が整い、場内に入ると、現れたのは白い布が敷き詰められ、天井からも沢山の布や電球が吊り下げられた幻想的な空間。お客さまはこの空間を自由に移動しながら作品を鑑賞します。

パフォーマンスは「音楽」「演劇」「美術」など、線引きをすることよりも「境界をぼかす」ことをイメージして創作されているようです。時間をかけて変化するインスタレーションのようなスズキタユキさんが操る布。星のように揺らぐ渡辺佳奈さんの照明。さまざまな楽器やループペダルを使い、空間を描くような

曾我大穂さんの演奏と言葉。それぞれが重なり、響き合いながら生み出されるパフォーマンスに、ツーステージ満員のお客さまからは熱い拍手が送られました。

開催日 六月二十二日(土)、

二十三日(日)

会場 かるぼーと小ホール

入場者数 三百六十二名



高知を撮る

第35回写真コンテスト入賞作品

絵金生誕祭の1コマ。

高知八幡宮から魚の棚、はりまや橋商店街、帯屋町と通り、大橋通で電車に乗って帰りました。

「大橋通り電停異聞」

(平成30年10月6日 高知市 大橋通電停)

笹 千賀子

このコラムでも何度が触れてきたが、私の会社員人生が最終章に近づいてきた。三十七年の会社員生活は、長かったようで案外短かったような気がする。

大学を卒業して高知に帰ってきた時には、地上波が最盛期の時代。女子アナブームでどの局も狭き門だったが、実際になってみると、しゃべることを生業にするのはこんなにも苦しく過酷なのかというのを嫌という程味わった。同時に記者の仕事にやりがいを感じ、どっぷり取材活動や番組作りに没頭した。

県内の放送局では最初の女性教育記者でもあった私は、芸術文化関係に活動の場を広げ、多くの委員を委嘱されている。プレーヤーとしても舞踊から音楽、書道、文芸に至るまで様々触手を伸ばしてきたので芸術文化の全体像を見ることは得意である。委員の役目は、自分らしく生きられる場でもあるのだ。

本職の会社員としては思い描いたほど出世はしなかった。やりたいことはあるが、均等法第一世代は、まだ男性が主導する力関係が根深く残っており、少し下の世代でやっと女

創造の翼



風俗歳時記

性の台頭が見られる。この残念な気持ちは、どこから来るのだらう。私生活も犠牲にして髪の毛を振り乱して働いてきたのにそれが理解されない悔しさなのではないかと分析する。三十七年ぶりに会った大学の同級生には、「君は高知なんかにいるんじゃないか、グローバルに活躍する人か」と思っていた」と言われた。東京にいる娘にも「確かに。お母さんみたいにやる気満々の人が、高知の田舎によく収まっているね。私が高知で働いたら絶対ダラダラするわ」と前出の言葉を追従した。私はいったい何がやりたいんだろう。今更迷う。

地位も名誉も金もあの世には持って行けない。死後に残るのは、「創り出したもの」だけだ。それでいうと、まさに無から有を生み出す芸術や文化がそれに当たる。これからは、地位や名誉は考える必要はない。

「何を生み出そうか」還暦を迎えもうひと頑張りできそうな私、創造の翼を広げて面白いことを仕掛けていきたい。

(立花香)

LINE 公式アカウント 「かるちゃーず」

(高知市文化振興事業団サポーターズクラブ)

事業団主催事業の
最新情報配信

無料招待の
ご案内



web 版
「文化高知」配信

横山隆一記念
まんが館企画展の
割引クーポン発行

友だち募集

※LINEの「友だち追加」からQRコードをスキャンしてください。

風伯

岬へ

を高知の方言からとったそのホテルは、素敵だった。広い部屋にリクライニンググチェア。ディナーでパチパチ火花が刺さったサプライズのケーキを出してもらおう。空と海に飛び立つようなテール席があって、四人ではしゃいだ。朝の露天風呂で海を見ていると、ああここは聖地なんだと思う。ホテルからの車中、またお遍路さんを見て予

雨が道を清め、風が塵を払った。妻子と車で足摺岬へ向かう。道にお遍路さんがいる。一人歩きやオレンジの袈裟をまとった外国人らも。いつかは私もお遍路さん、と願っていた。でも歩くなんてもう無理だなと思った。運よく家族四人の都合がつき、娘の誕生日にホテルを予約。家族で一泊の旅は予らが小学生のとき以来か。名

らに昔話をしてしまつた。いの町で母方の祖母と暮らしていた小学生のころ、誰なのか、托鉢が時々来た。祖母は米など包んで渡していた。こども心に、大人になつたら作法よく金品を渡すことができるかなどと心配した。それはお遍路さんが托鉢僧が判然としなが、確か祖母から聞いた話で、お遍路さんは死に場所を探しているのだと。だから功德を施すのだと。死に場所とは、行き倒れなど自然死のことだろうが、ホテルで俗人の限りを尽くしている私と、岬へ向かうお遍路さんは、人生の終わり方が違ふのか。岬の道に私がいる。心持ちはお遍路さん。でも何もわからない。若いころ岬に立つ投身防止の白く丸い「一寸まで」看板を見て、未熟な死生観を覚えた。またどうしても見たくなつた。白い看板を探したが、今はもうなくなつて

(三)

©2022 Komplizen Film Haut et Court Films Productions
TOBIS / Erittal Film und Fernsehproduktion

ぼくは君たちを
憎まないことにした

第204回
市民映画会

9月29日(金)
10月1日(土)

高知市文化プラザかるぼーと 大ホール

上映時間
ぼくは君たちを憎まないことにした
①11:00 ②15:20 ③19:10
ブルックリンでオペラを
①13:20 ②17:20

【入場料】一枚のチケットで両方の作品をご鑑賞いただけます。

一般：前売券 1,300 円、当日券 1,500 円

割引：1,000 円(映画会当日に会場販売)

※学生証、長寿手帳、障害者手帳等をお持ちの方は割引

【お問い合わせ】高知市文化振興事業団 088-883-5071

ブルックリンで オペラを



© 2023. All Film Entertainment LLC. All Rights Reserved.

今号の表紙

表情

高橋 美樹

文化高知の発行時期を象徴、想起するようなモチーフをシンプルな切り絵風に表現しました。色々な方向を向いた向日葵のオブジェクトに粒状の影を付けて、それぞれの花に表情が出るよう意識しました。

(たかはし みき／

龍馬デザイン・ビューティ専門学校2年生)



大阪交響楽団CONCERT

THE WORLD OF JOHN WILLIAMS

フルオーケストラで聴く名曲の数々
映画音楽の巨匠ジョン・ウィリアムズの世界



指揮 佐々木 新平 ヴァイオリン 北川 千紗

王座の間とエンドタイトル 「スター・ウォーズⅣ/新たなる希望」より
レイダース・マーチ 「インディ・ジョーンズ/レイダース 失われたアーク」より
ジュラシック・パークのテーマ 「ジュラシック・パーク」より
地上の冒険 「E.T.」より
シンドラーのリストのテーマ 「シンドラーのリスト」より (ヴァイオリン: 北川千紗) ほか

2024年9月7日[土] 開場 17:30 開演 18:30

かるぽーと 高知市文化プラザかるぽーと[大ホール]

全席指定

入場料・チケットの取り扱い

- 一般 / 前売券 5,800円、当日 6,300円
- こども無料券(小学1年生から高校3年生まで)
- こども同伴の保護者半額券 2,900円

※詳細については裏面をご覧ください。

2024年6月22日(土)
ローソンチケット 販売開始



助成 | 文化庁 劇場・音楽堂等における
子供舞台芸術鑑賞体験支援事業

協賛 | 大和ハウス工業株式会社

主催 | 公益財団法人高知市文化振興事業団
KSSさんさんテレビ

お問い合わせ | 公益財団法人高知市文化振興事業団
TEL:088-883-5071
<https://www.kfca.jp/kikaku>

